



いのち

福岡いのちの電話評議員

福島 あい子

(弁護士)



絵を見ることが好きで、時折美術館にでかける。久留米市美術館で「いのちを見つめて」と題する熊谷守一展が開催されていることを知り、早速行ってきた。自宅の庭で飽くことなく丹念に見つめ続けて描かれた猫、鳥、蟻などの動物や草花は、形も色も単純化されているが、そのものの本質をしっかりと捉えている。穏やかで、何回見ても楽しい。守一は97歳の長寿を全うしたが、「モリカズ様式」と呼ばれる独特の画風は70歳を過ぎてから確立されたと言われている。そのことにも元気がわいてくる。しかし、守一は5人の子のうち3人を失っている。「陽が死んだ日」と題する絵は、4歳で夭逝した次男陽の横たわる姿を烈しい筆致で描いている。やり場のない深い悲しみがひしひしと伝わってくる。

特別公開を待って見に行く絵として、長谷川等伯の「松林図屏風」がある。二隻の水墨画で、描かれているのは霧の中に浮かびあがる松だけである。けれども、じっと見入っていると、木々の間には霧が深く立ち込

め、遠くからは次々に沸き上がった霧が静かな圧力をもって迫ってくるのが感じられるようになる。何回見ても、心の深いところに働きかける何かを感じる。等伯には類まれな才能を持った久蔵という息子がおり、後に国宝となる「桜図」を描いたが、25歳という若さで急死した。等伯の悲嘆は計り知れず、失意のどん底に沈んだが、そのなかで等伯が描いたのが「松林図屏風」である。この絵を描くことで、等伯は悲嘆の沼から抜け出し自らを立て直したと言われている。

命が失われることはどんな場合であっても悲しい。あるべきでない時期に失われる場合の悲嘆は一層大きい。「いのちの電話」の向こうにある命を感じ、相談員の方々が命の声に耳を傾けて支え、命のともしびが消えることなく続いていくとすれば、とても大きな救いだ。ITやAIの普及で不安やストレスの増えている現代にあって、「いのちの電話」の果たす役割は大きいと思う。自分にできることは僅かだが、これからもできるだけの応援を続けてゆきたいと思っている。

昨年は豪雨や台風による災害が多い年でした。被災された皆さまには心よりお見舞い申し上げます。
本年が穏やかで健やかに過ごせる年になりますよう、願っております。

無条件の積極的関心

～私たちは通話者の何を受け止めるのか～

本山 智敬 氏 (福岡大学准教授/日曜班SV)



令和元年11月14日(木)午後6時30分から九州キリスト教会館4階ホールで、第3回全体研修が行われました。講師は、日曜班のスーパーバイザーをされている、本山智敬氏。その概要をご紹介します。

ロジャーズが提唱した3つの態度条件「共感的理解」、「無条件の積極的関心」、「一致」のうち、前回(2019年2月)取り上げた共感的理解の振り返りを、通話者の図形と同じものを描き取るプロセスで行ったのち、今回のテーマである無条件の積極的関心について詳しく解説されました。

まず、前回取り上げた共感的理解については、下図にあるように通話者が内面に持っている図形を聴き、遣り取りをしながらできるだけ正確に聴き手がその図形を描き取ることで、相互に体験の共有ができ、その共有されたという通話者の感覚が共感的理解であると振り返られました。

冒頭、2人1組になってワークが行われました。10分間、話し手が1週間自由にできる時間が与えられたら何をするかという話をします。その間、聴き手には、「旅行」「温泉」「おみやげ」の3つのワードを話し手に言わせるという秘密のタスクが与えられ、質問のしかたによって話の内容が変わってくる体験の場が設け

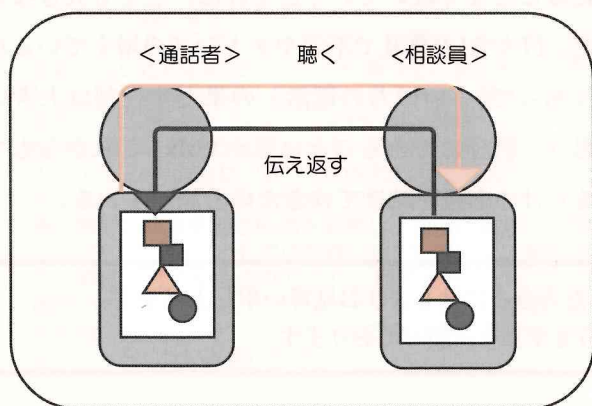
られました。聴き手はついつい関心があるところの質問をしてしまうため、聴き方によっては話の流れが変わっていきます。そのため、通話者に話したいように話してもらうためには、聴き手の「無条件の積極的関心」の態度が重要となってくるということでした。

次に、学生の日常会話を例に挙げて、話し手の話したい気持ちの部分と聴き手の反応の部分が微妙にズレながら会話が進んでいく様子が示されました。日常会話であれば、そのような会話の進み方は何ら問題なく、「聞いてもらえてない」、「話し足りない」というような印象はお互いにならないけれども、いのちの電話での遣り取りでは、話し手が本当に話したい内容となっているかということについて、よく見ていく必要がある点が指摘されました。しかし、通話者が何を一番話したいのか、それにどう応答したらいいのかはとても難しいわけです。それを把握するためには、その電話の中で通話者が表現した「気持ちの言葉」に注目することが大事であると語られました。

例えば、「イライラする」という言葉が通話者から話され、「どうすればイライラしなくなりますか」とか、その解決の方法は「AとBのどちらだと思いますか」と問われることがあり、応答に困ることがあります。そのような事例を示された後、そういうところには一切応答しないというロジャーズの対応が紹介されました。

通話者の、AかBかと問う言葉には、それに先立つ何らかの思いや体験があるはずで、そこに焦点を当てるということでした。ただ、思いや体験は、ストレートに言語化されているとは言い難く、その言葉の背後にある気持ちを汲み取る難しさがあります。それについては、本山先生の息子さんが幼いとき、ある体験した気持ちを「恥ずかしい」という言葉に結び付けていったエピソードを交えて説明を加えられました。

言葉は、そのとき湧き起こってきたある体験からの





感情を、とりあえず言い表しているだけであって、本当の体験過程は実はずっと動いています。ただそれを人に伝えるときに象徴化して言葉にしていくというふうに捉えていくと、AかBかという質問が出た場合にも、その背後には何らかの体験があって出てきたのではないかと捉えることができます。その気持ちの方に焦点を当てていくということを、実際のロジャーズの面接の場面を示しながら解説されました。

電話相談を受けるとき、自分の価値観や倫理観に大きく反する、こんなことあり得ないという話ができるとき、「無条件性」が力ギになってきます。日ごろの聞き方では、聞けることだけを聞くという条件付きであることが多い。しかし、通話者は、聞いてもらえないことを、なんとかさがる思いで聞いてもらいたくて、いのちの電話にかけてこられた方が多い。そのような内容を無条件に聞くことの重要性については、ロジャーズの文章を引用して説明されました。

クライアントは相手が自分の感情に受容的に傾聴していることに気付くにつれて、少しずつ自分自身に耳を傾けるようになっていく。(中略)とても恐ろしく、無秩序で、正常ではなく、恥ずかしいと思ってきたので、それまでは自分の中に存在するとは認められなかったような感情に対して、耳を傾けることができるようになるのである。(中略)つまり、ありのままの自分を受容するようになり……

こういうことが話し手の中で起きるということです。

ここでいう「無条件」の重要性というのは、語りにくい、自分でも否定したくなる部分をも聴いてくれる相手を前にすると、少しずつ自分の中で、自分自身を受容していくことができるようになるプロセスが起きるということです。それを本山先生は、ご自分の否定したくなる体験を話されながら、具体的に説明してい



ただきました。他者から無条件に受容してもらった体験、それによって次第に話し手の方も自分自身を受容することができるようになっていくということになるわけです。

共感的理解を中心とし、聴き手から確認・質問で伝え返す傾聴、話したいことが話せるための無条件の積極的関心という態度、言葉に先立つ気持ちや体験に注目し、ちゃんと聴いているかを伝え返しながらその図形を描き取ること、他者から無条件に受容された体験を基に、次第にその人も自分を受容できるようになっていくこと、本山先生はそのイメージをマラソンの伴走者で表現されました。

この「無条件の積極的関心」は、かつては「無条件の肯定的配慮」とする表現が多かったのですが、今回、執筆された書籍では、「無条件の積極的関心」という言葉で統一されたとのことでした。「肯定的配慮」では、否定的なことも肯定的に受け止めるような誤解を招くとのことでした。「無条件の積極的関心」は、ポジティブであってもネガティブであっても、それを評価するわけではなく、そのまま受け止めていく、また、英文メールの最後につける“Best regard”のような、温かい眼差しをその人に向けて聴いていく、そのようなニュアンスだとしてまとめられました。

第45期生の養成講座を開始しました

福岡いのちの電話では近年、ボランティアに応募される方が減少しています。それでも第45期生募集に13名の応募をいただき、11名の方が養成講座の開講式に出席されました。電話ボランティアが10名、事業ボランティアが1名でのスタートです。

第45期電話ボランティア新会員は11月の宿泊研修を終え、仲間意識といのちの電話に対する思いも深まったようです。事業ボランティアの新会員には、早速事務補助のお手伝いをしていただきました。



リレー随想 第18回

福岡いのちの電話後援会理事

早川 元久

(西日本新聞社 監査役)



「福祉、寄り添う二つの社会福祉法人」

福岡県筑前町の夜須高原にある「社会福祉法人夜須高原福祉村やすらぎ荘」をご存じだろうか。

1972（昭和47）年に俳優の故・森繁久彌さんたちの尽力によって、全国でも例を見ない在宅での心身障がい児（者）療育訓練施設として山紫水明の夜須高原に産声を上げ、以来、脳性まひ児の機能回復訓練と発達障がい児などの療育訓練を中心に活動をし、昨年で開設47年を迎えた。

九州はもとより全国から利用者が集まるのが特徴で、特に春と夏の動作法研修会には、アジアなどの諸外国からも研修生が参加する。

開所からの利用者は、昨年10月末で44万人を超えた。やすらぎ荘で訓練を受け、自立して社会で頑張っている人も少なくなく、またやすらぎ荘は家庭で思い悩んでいた親たちにとっても、お互いの苦しみを語り合い、励ましあう「やすらぎの場」となっている。

しかし、やすらぎ荘は常時の収容施設でないため、国や公的機関からの援助ではなく、企業、団体や一般市民の方々の寄付金で運営されてきた。これまで、幾たびも存続の危機に直面したが、そのたびに「100万人基金運動」など温かい善意のご支援により危機を乗り越えてきた。

やすらぎ荘47年の歩みの中、1992（平成4）年5月には平成天皇ご夫妻（現在の上皇、上皇后）のご来荘を受け、2002（平成14）年4月には開設30周年感謝の集いも開催した。2009年（平成21年）5月には、重障者用浴室設置など多くの人たちの支援で支えられてきた。こうした中、2022年4月に開設後半世紀を迎える

やすらぎ荘は施設の老朽化が進み、移転新築の検討も進んでいる。

福岡県内だけでなく日本全国から療育訓練を引き受けているやすらぎ荘は、年々寄付金、利用者数が減少傾向にあり、年間延べ利用者数も10年ほど前までは1万人だったが、近年は4,000人程度に落ち込んでいる。このところの度重なる自然災害で、やすらぎ荘に対する善意の寄付が減ってきている感は否めない。

一方、私が後援会理事を拝命している「福岡いのちの電話」も同じ社会福祉法人として、一人でも自殺者を出さないため、24時間年中無休体制で、悩みや不安を抱える方々に寄り添い、昨年で35周年目の節目を迎えた。

西日本新聞社は「やすらぎ荘」においては開所以来、理事長をはじめ所長の派遣や紙面を通じての各種募金活動のお願いなど、さまざまな支援を継続している。同時に、「福岡いのちの電話」についても、紙面編集に関わってきた歴代の同人たちの努力で社会的責任を紙面を通じて訴え続けている。同じ社会福祉法人として役割は違えども、弱者や尊い命を守る活動を、地域づくりの先頭に立つという社是をかみしめ、微力ながら今後も活動していきたい。

冒頭申し上げた昭和から令和に続く全国にも例を見ない、心身障がい児（者）の療育訓練施設の継続維持のためのやすらぎ荘、そして市民ボランティアによる活動を続ける福岡いのちの電話に対する皆さんの多大なご支援をこの場を借りてお願いするものである。

予告

自殺予防公開講座

「思いとどまって
もらうために」

2月23日(日)午後2時から
都久志会館ホールにて

内容

「心の万葉学
～万葉びとの愛と死生観を学ぶ～」

講師

上野 誠 氏 (奈良大学教授)



開局35周年記念事業

● 35周年記念チャリティイベントが開催されました



「津軽三味線プレーヤー 史佳 講演&演奏会」が11月30日午後3時から福岡市都久志会館ホールで行われました。「三味線と生きる～人生の絶望から救ってくれた母のひと言～」をテーマに、史佳

氏と母である新潟高橋竹山会二代目の高橋竹育氏による講演と演奏が披露されました(写真)。うつて人生のどん底にあった史佳氏が回復した今があるのはお母様の存在というお話。そして三味線の競演。参加者に大きな感動を与えたひとときでした。

感想の一部をご紹介します。

「三味線の音色が語りかけるような深い音色。素晴らしい。感動しました」、「私も長い間うつに苦しんでいましたが、今の人生で一番幸せです」、「力強い演奏に元気が出ました。オリジナル曲もやさしく強く、よかった!」、「親子の絆、素晴らしいと思いました」…などなど、大変よかったの声が多く寄せられました。

● 開局35周年の集いが開催されました

福岡いのちの電話は10月22日で開局35周年を迎えました。11月30日午後5時から、福岡市長(代理)、日本いのちの電話連盟事務局長を迎え、記念の集いが行われました。当日は北九州センター、佐賀センター、宮崎センターからもご参列いただき、ボランティア、理事・評議員、後援会理事の出席の下、福岡いのちの電話の存在意義を改めて確認しました。

林幹男理事長あいさつ(写真左)と会の様子



2団体から ご寄附を頂戴しました

福岡いのちの電話は、ご存じのように多くの市民の皆さま、企業や団体からのご支援で運営しています。この度、2団体から新規にご寄附をいただきましたのでご報告します。有り難くお礼申し上げます。

いのち奏でるコンサート

京都カルテットとして全国でコンサートを行い、各地のいのちの電話センターに収益金を寄附されています。福岡市では11月30日午後3時から演奏会が行われ、ご寄附をいただきました。

また、演奏後に福岡いのちの電話の事業ボランティアが参加者へ募金を呼びかけ、11,000円の浄財が集まりました。

京都カルテットの演奏の様子



MRDTソニー会

(一般社団法人MRDT日本会
ソニー生命分会)

10月3日、福岡市内で同会の全国研修会が開催され、その席上において寄附金の贈呈式が行われました。河邊事務局長が受領し、感謝状をお渡ししました。(写真下)

